

家々だろう。ひたすら申し訳なかった。

薄暗い部屋で窓際に凭れて待つ。シャワーを浴びて着替えたナオヤが来るまでそう時間はかからなかった。

さっきの暴力的な衝動は去ったのか静かにこちらへ歩いてくる。

「飲むか？」

頬に冷えたコーラの缶をあてられた。

「冷たっ……うん、もうっ」

ナオヤは持っていた酎ハイの缶に口をつけた。酔ってはいない。缶一本程度で酔いはしないはずだ。

「持っている」

飲みかけの缶を渡された。押入れを開けて布団を敷いている。

何を考えているのか解らなくても、さすがに何をすすりつもりなのかは想像がつく。見ていられなくて窓の外に視線を追いやった。

ナオヤが隣に座る気配がした。

オレから缶を取り返して呷る。オレもコーラの缶を開ける。飲みながらどうにか言葉を探した。

「オレはさ、今でもナオヤを……大切な家族だと思ってるんだ。」

酎ハイを呷るナオヤの喉仏に目がいった。飲み干した缶を置いて、こちらを見ずに薄く笑う。

「それで？ お前は俺を天使の陣営に引きこもうとでも言うのか？」

「違う。なあナオヤ、どうしてオレが憎いのにあんな事したんだ？」

「ククッ……憎い？ ああ憎いさ。俺を裏切ったア・ベル……愛しい弟よ」

オレはア・ベルじゃない。そう言いたくても言えなかった。一人だけ選ばれたという意味では同じだ。

言葉を無くしたオレを抱き寄せて、ナオヤはなおも笑む。

「今も昔もお前はこの兄のものだ。俺のものに俺が触れるのは当然だろう」

首筋に広げた手が押し当てられる。何度か喉を押さえた手には結局力は込められず、顎や耳の後ろをくすぐられた。

こそばゆさに身を振る。逃げようとしたと思ったのか、オレを抱える腕の力が強くなった。

「待って……んっ……」

袷に手が差しこまれる。触ってくる手が冷たいのか、